



郷土史

ていね

第44号

平成23年8月10日
手稲郷土史研究会会報

第63回（平成23年7月13日）定例会の会員発表

～ 樺太に生まれ・各地を流転・手稲を終に ～

前田 水落恒彦氏

関東大震災の直後、戒厳令が敷かれ緊張高まる中、1923年樺太豊原生れの87歳。その長い道程を戦前・戦中・戦後に分け、その時々のお出来事と重ね合わせてお話しされた。

（戦前）

公務員の父親の仕事（営林署）の関係で主に僻地を転々とし、水落さんが小学2年を終えた時点で5回もの転居を経験され、3年の時、父親が病気になり退職。その後、苗圃の番人をしていましたが失業。やがて書店を開くことになった。書店には多種多様な本が揃っており、読書には事欠かなかった。右系のほんもあれば、左系の本もあった。ある時手にした左系の本を目にした時、水落少年の琴線に触れた。その事が、その後の人生に大きく影響する事となった。

1936年小学高学年の頃、2・26事件が起き、再び戒厳令が敷かれた。

翌年の1937年には蘆溝橋事件が起き日中戦争へ、そして日米戦争へとつながっていった。

旧制中学の頃は、豊富な読書力で高度の知識が蓄えられていたから、日本帝国の進む道に大きな疑問を抱いていたので、教師とは堂々と激論を交わっていた時代で、好まざる生徒であったかも知れない。

水落少年が次に目指すは、最高学府の文科系。しかし厳しい社会情勢下。水落少年の素質を知る教師の思想的に「色」の鮮明な文系をやめて、東京高師の数学系に志望を変更するよう諭され、ここは素直に従った。おそらく嫌いな数学系なら不合格になるだろうと思われていたのだろうが、合格してしまった。

（戦中）

戦局は激化の一途をたどり、国内の統制も一段と厳しさを増していく中、1942年3月、東京高師入学のため上京した。入学直後の4月18日には、B25による本土初めてとなる空襲に見舞われた。

（東京・名古屋・神戸）

一方では東条大将暗殺計画が進められていたという。これら反・軍国主義者への弾圧も水面下で進められており、東京憲兵隊により15名中、14名が逮捕された。残りの1名は、係りのない水落さんであったという。知識が豊富であるがために自ずと口から出る言葉が災いし、濡れぎぬを着せられ、いつの間にか追われる身になってしまったのだろう。

親が呼び出され、1944年3月東京追放となり、樺太に帰り、樺太憲兵隊の監視下に置かれる身になってしまった。あげくの果てに親からも勘当されてしまった。

1945年3月、東京に戻り京浜大空襲下の工場に派遣されたが、2ヶ月間続いた空襲で工場は壊滅。沙汰あるまで待機することとなったので、身内である軽川国民学校の校長宅に身を寄せていた時に軽川駅付近が空襲を受けた。これを丘の上から眺めていたという。

水落さんの行くところ、官憲と敵機が追っているように思えた。

口には出さないが、日本がこの戦争に勝つとは誰一人思っていないだろう。監視役の樺太憲兵隊に居所を報告しようとしたが、すでに逃亡していて、監視役の方が行方不明。おかげで水落さんはようやく解放された。偶然に出会った遠縁の人の勧めで、北見地方の農林に入って働くことになった。ここで8月15日の終戦を迎えた。

（戦後）

1945年8月上湧別村で、樺太から引揚げて来た家族と合流。12月には、旧東京高師から戦時下の不当処分取消と復学の要請が届いたが復学はしなかった。1946年紋別町に移り半農半労に就き、1948年には北見市へ移り、戦後の共産党再建に参加。1973年の全国大会で現役幹部を引退。1983年、現在の手稲に落ちつくまで、数え切れないほど転々と渡り歩き、理不尽な目に合いながら、波乱に満ちた87年間を、わずか60分で語っていただきました。

（文責：佐藤至）



伊能忠敬大図展開く

主催 社団法人・北海道農業土木測量設計協会

主管 手稲郷土史研究会

後援 国土交通省北海道地方測量部、国土地理院北海道地方測量部、「測量の日」北海道推進協議会、札幌市、札幌市教育委員会、手稲区役所、手稲区連合町内会連絡協議会

驚嘆、床一面の蝦夷地

200年前、手稲・札幌登場せず

= 新川か「ヲタルナイ川」の記述 =

手稲で初の「伊能忠敬大図フロア展」は、7月29日から3日間、手稲コミュニティセンター（手稲区手稲本町3-1）で開かれました。夏休み直後の土、日曜をからませた日程を組んだことから大きな反響を呼び、入場者総数は915人に達しました。

37枚の北海道沿岸を再現すると、14m×18mのバカでかい規模となり、体育館の床一面が占拠され、まず、入場者をビックリさせました。それでも、蝦夷地や知床半島の一部は欠けています。

入場者は、地図作成のすべての作業は、忠敬の仕事だったと思い込んでいました。ところが、忠敬が歩測したのは、福島町・吉岡から別海町・西別

までの太平洋沿岸で、日本海側は忠敬の弟子、間宮林蔵だったことが説明を聞いてわかります。

忠敬は、寛政12年（1800年）4月19日、江戸を出発、10月21日帰着するまでの180日間、同行の6人と共に3225キロを歩き続けたといっています。この実績が幕府に評価され、17年かけて全国を歩測調査し、日本全図を完成させました。

透明フィルムの上を自由に歩きながら、好みの場所を自由に見ることができました。解説するのは、主に古地図研究で北海道内随一の評価が高い高木崇世氏（73）（豊平在住）。各地に伝わるエピソードを交えながらの解説は、ときに見学者の爆笑を誘い、興味をそそるものとなりました。

なかでも、忠敬の本心は、地図の作成だったので

はなく、地球とはいかほどの大きさなのかにあったといっています。これを確定させるには子午線1度の地表の長さを確定させることだと確信します。今日、1度の長さは111kmが常識ですが、忠敬が解き明かした1度は、なんと110.74kmの精度だったといっています。200年前のチョンマゲ時代にわかっていました。

さて、札幌周辺ですが、ハサミ川（発寒）、フシユ（コの誤記か）サッポロ川（伏古）が散見されるだけで、札幌も手稲も登場しません。わずかに新川の祖流とも想像されるヲタルナイ川の表記はありますが、アイヌ語で砂の中を流れる川を「ナイ」といったので、新川かどうかは疑問とされています。

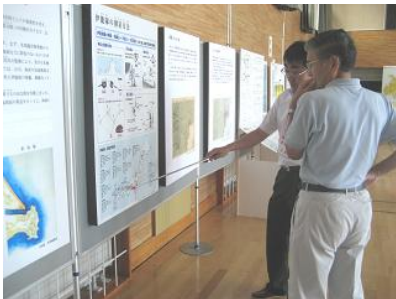
また、札幌のやや西に位置する場所に「カムイヘロキ山」なる表記があり、これが手稲山だろうとの疑問に、高木氏は明治政府は山名の6割を変更

しているの、手稲山かどうかは不明との回答でした。

会場側壁では、古い時代の奇想天外な地図など変遷がわかる地図約50点のほか、忠敬が測量に使用した天体を測る中象限儀、距離を測る鉄鎖、目標物となる梵天などのパネル、測量技術の発達がわかる測量器具の数々。忠敬が1歩69cmだったというワラジの足跡を表示する歩測体験コーナー、1階ロビーでは「人間忠敬」のアニメ放映もありました。

会場には、祖父母や両親に連れられた小、中学生、若い夫婦、散策の帰路立ち寄った1万歩会の会員、坂田手稲区長、高田市民部長、連合町内会長、手稲郷土史研究会会員らの顔がありました。

入場者にアンケートをお願いしましたが、「地名が現在と同じなのに驚いた」（北区、50代、女）、「先人の偉業に頭が下がる」（手稲、60代、女）、「解説がわかりやすく、熱がこもって引き込まれた」（手稲、60代、男）「説明員が大勢いて楽しめた」（南区、30代、女）などの感想が寄せられました。



熱心なファン続々、三日で九一五人

手稲区コミュニティセンター

高木講師、流暢一時間

奇想天外な北海道地図

おもしろ講座聴講60人

忠敬大図展の前座ともいえる「蝦夷古地図おもしろ講座」は、前日の29日午後1時から同会場会議室で開かれ、古地図研究では道内第1人者の高木崇世芝（たかよし）氏の流暢な解説に、参加した約60人のファンが熱心に耳を傾けました。「地図に一段と興味がわいた。多くの手稲区民に知らせるべきだ」として、聴講者の中から「次」の講演予約が出るなど、早くも反響が出始めています。

高木氏は、釧路、渡島地方で38年間、小中学校の教師をしていました。本職は美術だったのに、小規模校に勤務したため、全学科をこなしたと会場をわかせ、自らの名前の由来も紹介して、来場者をなごませました。

パワーポイントで紹介された古地図の最初は、幕府が認めた正保日本総図（1644年）。松前藩が提出したもので、下半島に比べると、なんと奇妙で小さな北海道。あげく、ほぼ中心に湖らしき表記がある丸型。松前藩は本州各地と違って、

他藩と境界を接することがなかったため、小さな経営だったことを幕府に印象づけたかったからではないかといえます。中央の湖らしきものは、長沼付近の湿地帯を指しているといえます。この湿地帯をシコツといい、死骨と書きました。が、のちにこれではあまりに縁起が悪いので、千年生きる場所として千歳になりました。

1668年以降に写された蝦夷地前図と似ていますが、四角なカラフト、千島列島が根室の先に米粒のように点在しています。

蝦夷松前之図になると、北海道とは思えない奇妙な形になり、カラフト、大陸が混在し、小人島、大コク島、女島といった想像上の島も登場します。外国の古地図にも想像上の島々が再三登場するといえます。地図は、男の作業だったので、女はやっぱり懂れなかったのだろうと、みんなを笑わせました。

1808年、幕府の雇いだった秦億丸が作成した蝦夷地絵図になると、北海道、サハリン、国後、択捉が現代人にも理解できそうな地図になってきます。

1821年、伊能忠敬が17年にも及ぶ全国測量を終え作成された大日本沿海輿地全図になって、はじめてわれわれが学校で習った北海道になってきます。ただ、忠敬は太平洋岸を東進、別海町付近までを往復しただけで、残る日本海側は、忠敬の弟子にあたる間宮林蔵の調査をもとに描かれていると紹介しました。測量の方法が師弟で一緒だったので、合わせるとピッタリ一致しました。

これら古地図の中には、カラフトが大陸と地続きかもしれないという聞き取り調査だけに終わって、ひょっとして島かも知れないとして、接しているとすればこと紙1枚をめぐって2通りを添付したごまかし地図もあると披露しました。後に間宮林蔵によって海峽が確認され、サハリンは島と確定するのです。



高木氏、9月に曙で再登場

古地図は明治2年（1869年）開拓使から出版された初の北海道地図まで20点を紹介、2時間いっぱい使って参加者を魅了しました。この間、質疑にもやさしく応じ、参加者は口々に「地図がこんなに面白いとは思わなかった」と感想をもらっていました。

痛快な講演に、郷土史研究会副会長で、曙第1ふれあいクラブの鈴木清士会長は「ウチの会員にぜひ聞かせたい」と、9月30日午前10時から曙第1町内会館で開く9月例会に高木氏を招聘したいとの予約をすませたということです。



バッタの話と蝗害に会ったと思われる開拓村の建物

前田 濱埜静子氏

北海道の歴史の 1 ページに語られるトノサマバッタの生態及び、蝗害についてお話を聴きました。バッタとイナゴの違いも判らず、戦時中学童疎開（長野県）で田圃で取ったイナゴ（バッタ？）を食べた事を思い出します。

1. 手稲山口バッタ塚

北海道大百科事典下巻の記述によると、1880（M13）年、中川郡十勝川西で発生したトノサマバッタが、勇払原野で 2 群に分かれてその 1 群が札幌に飛来した。このバッタを駆除の為、卵や幼虫を掘って埋め、何層にも重ねて積み上げたものをバッタ塚と称し、有名なのが手稲山口バッタ塚である。尚、手稲山口バッタ塚の近くの濁川に架かる橋をバッタ塚橋と云う。

2. 北海道蝗害報告書について

開拓使札幌勧業員と戸長によって記された蝗害報告書の蝗害年表の報告によると、

- ◎ M12 年十勝国でトノサマバッタが発生。
- ◎ M13 年 8 月同地区で大発生。
- ◎ M14 年日高・胆振・石狩に飛来し、政府は駆除の為 5 万円を支出。
- ◎ M15 年被害対応に役人 500 人を出役し、7 万 6 千円を支出。
- ◎ M16 年には函館・根室管内にも飛蝗し、農林省は蝗害を北海道で食い止めるべく指令を出す。
- ◎ M18 年終息

3. バッタの特徴

バッタにはキリギリス、イナゴと云った類似の昆虫がいるが、食性や若干の構造の違いがみられる。バッタの好みは、粟・稗・大小麦・牧草等で、大豆や小豆は好まず、十勝地方で小豆が主に作られるようになったのはこの時の経験からであろう。

又、バッタは環境により体色が異なり、孤独相と云って、草類が豊富で単独でも生きられるバッタの体色は緑色である。一方大きな群で育ったバッタの体色は茶褐色であり、これを群生相と云う。

その他仮面ライダーや、夏目漱石の「坊ちゃん」の一節等バッタに纏わる話があった。



次回の予定

次回（9 月 14 日）は、国岡茂男氏・中山恒雄会員の講演「昭和 40 年代の手稲、バッタ塚の保存」と、鈴木玲会員の会員発表「区内の河川に見られる生き物」を学習する予定です。

会場は、視聴覚室です。

4. 最後に

開拓の村の展示建造物に関係する方々で、蝗害と関わりについて、エピソード等も紹介された。

終わりに蝗害報告書に出てくる北海道をリードした方々を紹介して講演を締め括った。

改めて、先人の艱難辛苦を踏破し、今の豊かな北海道の礎となった方々に畏敬と感謝の念を強く抱いた次第です。

（文責：松永恭一）